



《默認浜-浦添市イバノの海-complex vol.1》
(27分／2007)

米軍基地に隣接する「無法地帯」としての浜。不法投棄のゴミ、放置された船、そこに集う人々との会話をおさめる。境界の隙間に存在する異質な空間から沖縄の歪みを露わにする。



《OKINAWA 墓庭クラブ》
(6分／2004)

軽快な音楽にあわせて墓の前で延々と踊り続ける。沖縄特有の墓庭をハシの場と捉え、死者と交歓するかのように無我夢中で踊る姿は、全身全霊をかけ「生きている」と痛感させる。



《アーサ女》
(7分／2008)

アーサの浮かぶ海面で浮かんだり沈んだり、その度に海の風景が変わり、横滑りに沖縄のいくつかの海岸線が映る。そこに聞こえてくる女性の息づかいは、溺れて苦しんでいるよりも囁いているようにも取れる。水辺に浮かぶ女性のイメージが太平洋に浮かぶ軍事基地の要としての沖縄の姿と重なる。



《肉屋の女》
(27分／2012)

米軍基地敷地内の黙認耕作地に実在する闇市で肉屋を営む女性を主人公に、建設現場で働く人びとを交え、黙認浜や鍾乳洞などを舞台に展開。人のあらゆる帰属を超えた存在として「肉」を、そしてその循環を描く。



《BORDER》
(8分／2003)

米軍の飛行訓練の爆音や浜辺から海の中へと続く有刺鉄線の映像が映し出される。日々の営みのなかに存在する、沖縄を取り巻くあらゆる「境界」への気付きを促す。



《オキナワ TOURIST》
《-日本への旅-》

国会議事堂前で沖縄の写真を掲げ、沖縄観光PRをするパフォーマンス。観光キャッチコピーでしか話せないが沖縄人の悲痛の叫びのようにも見える。映像と音声をすずらん化効果で、沖縄からの声が日本本土に届かないことが示されるようだ。



《オキナワ TOURIST》
《-墓庭エイサー-》

死者を弔うための伝統芸能である「エイサー」。頭から紙袋を被り、簡素な衣装をまとうだけの異質なエイサーによって、エイサー本来の目的ともいえる沖縄の生死観を取り戻す試みである。



Music Song Dance
『PACIFIKMELTINGPOT / In Situ Osaka 2013』リサーチワーク編
(60分／2013)

フランス人振り付け家のレジーヌ・ショビノのワークショップを追った記録映画。



《JCDN 国際ダンス・イン・レジデンス・エクスチェンジ・プロジェクト VOL.5》
《Nora Chiaumire in 沖縄》
(40分／2015)

アフリカ人ダンサー、ノーラ・チッポムラの沖縄滞在制作の記録映画。



《あなたの声は私の喉を通った》
(7分／2009)

戦争を歴史の出来事として風化させるのではなく今につなげることは可能か。サイパン玉碎の体験者の語りを自分が語り直す、他者の経験を想像することで戦争体験の「継承」を試みる。



《沈む声、紅い息》
(6分／2010)

省みられないまま捨て去られる声が、海中に沈むマイクロの束になぞらえている。泡となって波間に揺れでは消える歌声に声を傾けようと希求する心と、誰にも届けられまいという諦念。その両方を抱きしみて、作品はアンヴィヴァレンツなまま、見る者に投げかけられている。



《コロスの唄》
(9分／2012)

古代ギリシアの合唱隊を意味する「コロス／Chorus」。木漏れ日のなかで地面に横たわり、戯れる人々が映し出される。世代や性別を超えた彼らの声がボリューミーとして立ち上がる。



《創造の発端 -アブダクション・子供-》
(18分／2015)

ダンサーの川口隆夫が、舞踏家の故・大野一雄の伝説的な舞臺を再現するプロセスに山城が密着取材した。川口が他者（大野）を自らの身體に取り込むとする行為の記録は、ただのドキュメンタリーではなく、得体の知れない剥き出しの身体となって観者の前に立ち現れる。



《土の人》
(26分／2016)

軍事基地のある沖縄と済州島を撮影場所に、架空の土地に生きる「土の人」を描く。空から降ってきた糞（種）から言葉を取り戻し、展開される物語は歴史や現状を暗喩しながらも、より俯瞰的な視点で未来を見据えている。

作品画像：© chikako yamashiro
作品解説：町田恵美

05/27 (土) 19:30 ~

《默認浜-浦添市イバノの海-complex vol.1》、《アーサ女》、《肉屋の女》
→クロストーク ゲスト：近藤健一（森美術館キュレーター）

05/28 (日) 19:30 ~

《BORDER》、《OKINAWA 墓庭クラブ》、オキナワ TOURIST 《-I Like Okinawa Sweet-》
《-日本への旅-》、《-墓庭エイサー-》、《ホースパックライディングガールズ》(7分／2008)
→アーティストトーク
お蔵入りした幻の作品を今回限り公開いたします。

06/03 (土) 19:30 ~

Music Song Dance 『PACIFIKMELTINGPOT / In Situ Osaka 2013』リサーチワーク編
山城知佳子+砂川敦志（水上の人プロダクション）
→クロストーク ゲスト：富田大介（追手門学院大学社会学部准教授）

06/04 (日) 19:30 ~

《JCDN 国際ダンス・イン・レジデンス・エクスチェンジ・プロジェクト VOL.5》
Nora Chiaumire in 沖縄
→アーティストトーク

06/10 (土) 19:30 ~

《あなたの声は私の喉を通った》、《沈む声、紅い息》、《コロスの唄》
《創造の発端 -アブダクション・子供-》
→アーティストトーク

06/11 (日) 19:30 ~

《土の人》
→クロストーク ゲスト：土屋誠一（美術批評家／沖縄県立芸術大学准教授）

<入場料> ¥1500 税込(1ドリンク付) 定員：40名(事前申込／先着順) ※座席に限りがあります。予めご了承ください。

<上映会のお申込み> RENEMIA TEL 098-866-2501 (受付時間 14:00 ~ 19:00 ※日曜定休)

作家略歴

山城知佳子（映像作家、美術家）

1976年沖縄生まれ。沖縄県立芸術大学大学院絵画専修修了、現在同大学非常勤講師。近年の主な展覧会に、2016年「あいちトリエンナーレ2016」、2015-16年「第8回アジア・パシフィックトリエンナーレ」QAGOMA(オーストラリア)、2015年「East Asia Feminism: FANTasia」ソウル市立美術館(韓国)、2012年「森美術館MAMプロジェクト018: 山城知佳子個展」森美術館などがある。KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭2017では「土の人」と題し、近年の作品を組み合わせ発表した。

ゲスト略歴

近藤健一（森美術館キュレーター）

2003年より森美術館勤務。「MAMプロジェクト018: 山城知佳子」(2012)、「アラブ・エクスピレス展」(2012)、「アンディ・ウォーホル展」(2014)、ビル・ヴィオラやゴードン・マッタ=クラークの映像作品上映(2015)などを企画。2014-15年にはベルリン、ハンブルガー・バーンホフ現代美術館で客員研究員を務める。

富田大介（追手門学院大学社会学部准教授）

専攻は美学、身体文化論、ダンス。近著に、太平洋諸地域の研究者やアーティストがR・ショビノを軸に展開した国際プロジェクトの記録集『身体感覺の旅——舞踏家レジーヌ・ショビノとパシフィックマルティングボット——』(大阪大学出版会、2017年)がある。

土屋誠一（美術批評家／沖縄県立芸術大学准教授）

共著書に、『実験場 1950s』(東京国立近代美術館、2012)、『現代アートの巨匠』(美術出版社、2013)、『現代アートの本当の見方』(フィルムアート社、2014)、『拡張する戦後美術』(小学館、2015)、『批評 前／後 繙承と切断』(ユミコチバアソシエイツ、2017年)、『現代アート10講』(武蔵野美術大学出版局)など。

RENE MIA

沖縄県那覇市牧志 2-7-15 ☎900-0013
TEL 098-866-2501
www.renemia.com

